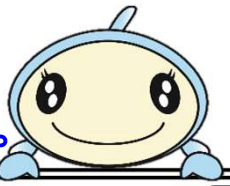
回　覧

第６号
Ｒ7.9月



【発行・編集】
滑川町教育委員会
教育長　上野　修
TEL0493-56-6907

町の子供は町で育てる

「3つの合言葉」元気・学び・会話

滑川町教育委員会だより

「学んでよかった町へ　-チーム滑川での教育-」

平和は教室から生まれる

８月１５日、役場の課長会議で大塚町長が「８月や６日９日１５日」という詠み人知らずの歌を紹介し、続けて「今日は終戦記念日です。皆さんにも平和について、今一度考えていただきたいと思います。日本は唯一の被爆国であり、戦争の悲惨さや平和について次世代へしっかりと伝えていくことが大切です。戦争と平和について、親から子へ、そして孫への伝承だけでは、いずれ薄れていきます。日本国全体での取組みが必要だと感じており、町でも平和記念事業を実施していますが、継続して平和について伝えていくことが必要ではないかと思っています。私も毎日のように平和について考えていきたいと思っています」と述べられました。また、小柳副町長は「今年は、戦後８０年で節目の年です。今月号の『広報なめがわ』で、上野昇元町長の戦争に関する記事を特集しています。ぜひ多くの方に読んで頂きたいと思いますし、皆さんにお声がけいただいて、戦争が二度と起きないように啓発をお願いできればと思います」と述べられました。

戦後８０年を迎え、戦後生まれの人が人口の８８．８％を占めるようになった現在、戦争の悲劇を繰り返さないようにするために、そして未来への教訓として平和を築くために、戦争の記憶をいかに継承していくかが我が国の大きな課題となっています。一橋大学の吉田裕名誉教授は、戦争は遠いものと感じる若い世代へのメッセージとして「人間が持つ想像力を信じてほしい。体験していないことでも、歴史から学ぶという主体的な作業を通じて、戦場や空爆の下で何が起こるかを想像する力を身につけてほしい」と語っています（８月１４日毎日新聞）。８月６日の広島平和記念式典で湯崎知事は核抑止論の限界を分かりやすく説明していました。「ペロポネソス戦争以来古代ギリシャの昔から、力の均衡による抑止は繰り返し破られてきました。なぜなら、抑止とは、あくまで頭の中で構成された概念又は心理、つまりフィクションであり、普遍の物理的真理ではないからです。我が国も、力の均衡では圧倒的に不利と知りながらも、自ら太平洋戦争の端緒を切ったように、人間は必ずしも抑止論、特に核抑止論が前提とする合理的判断が常に働くとは限らないことを、身を以て示しています」この言葉からも歴史を学ぶことの大切さがひしひしと伝わってきます。

広島平和記念式典では、２人の小学生が「平和への誓い」を読み上げました。佐々木駿さんの曾祖母は、１２歳の時、爆心地から１．５㌔の地点で被爆し、黒い雨に打たれました。乳がんと大腸がんを患い、６９歳で亡くなりました。差別を恐れ、被爆者であることを隠し続けたそうです。「戦争の本当の怖さは、終わっても続く人々の苦しみ。二度と核兵器を使って欲しくない」佐々木さんは、会ったこともない曾祖母の苦しみを自分事として感じています。佐々木さんは幼少期から身に付けた英語を使い、小２の時から平和記念公園で訪日外国人に原爆の歴史を伝えるガイドを続け、爆心地と世界の「平和の架け橋」を目指しています。関口千恵璃さんは、ロシアが侵攻するウクライナから母と３人で避難してきた姉妹と友人になりました。姉妹の父はウクライナに残っており、関口さんは大切な家族との日常を奪うのが戦争だと考えるようになりました。「核兵器は国が主張を突き通し、威嚇するための道具。世界の主導者に争いではなく違いを認め、話し合って解決する大切さに気付いてもらいたい」関口さんには、姉妹とその家族の心情が手に取るように分かるのでしょう。

宮前小学校と福田小学校には、戦死者のための忠魂碑があります。そこには現在の在校生と同じ名字の戦死者の名を見いだすことができます。私達にとっても、戦争は決して遠い世界の出来事ではないのです。「平和への誓い」を読み上げた２人がそうであるように、人間の想像力は時空を超えて発揮されるのです。私達は歴史を学び、世界の現状を理解しなくてはなりません。「平和の誓い」では、「多様性を認め、相手のことを理解しようとすること。一人一人が相手の考えに寄り添い、思いやりの心で話し合うことができれば、傷つき、悲しい思いをする人がいなくなるはずです」と述べられました。このことは特に滑川町の小中学生の皆さんが、それぞれのクラスで実践していただきたいと強く願います。

「戦後世代に戦争責任はなくても、戦争の事実を知る責任はある。戦争を遠ざける力は、いつだって教室から生まれる」４０年以上の長きにわたり平和教育に取り組んでこられた中央大学文学部特任教授、中条克俊さんの言葉です。

図書館からのおすすめ絵本

図書館では、家族が一緒に本を読むことで、読書に親しんでもらうとともに、
家庭内のコミュニケーションを深めることを目的とした「蒙読」（家庭読書）を推進しています。
子どもも大人も楽しめる、家読にぴったりの絵本をご紹介します♪

『もしも空が落ちてきたら朝食に雲をいただきましょう』
クーパー・エデンズ 作
角田 光代 訳
ほるぷ出版

『もしも空が落ちてきたら朝食に雲をいただきましょう』

こんな人におすすめ　心配ごとや不安があって悩んでいる方

「バスがなかなか来ないときは、流れる雲をつかまえて乗っちゃいましょう」「思ったことを上手く言えないときは、鳥たちに歌い方を習いましょう」など「こんな時はこうしましょう」と素敵なアドバイスをくれる1冊です。

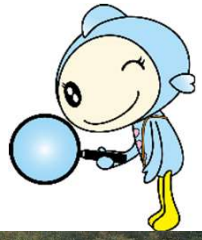
驚いてしまうような解決策もありますが、自由な発想で困難をポジティブに乗り越えます。不安になったり、壁にぶつかったりしたときなどは、この本のように少し強引な方法でも“なんとかなる！”と考えることが出来たら、心がふっと軽くなるかもしれません。『もしも暗闇が怖かったら夜空に星を加えましょう』も所蔵しています

※この本は、滑川町立図書館に所蔵があります（貸出中のときは予約ができます）

＝＝

新シリーズ 第7回

「滑川町の歴史」part７



弥生時代のお墓　～方形周溝墓～

弥生時代になると集落の近くに共同墓地が作られ、縄文時代からの土坑墓と呼ばれる穴を掘って埋めるお墓に加え、土器の甕を棺がわりに使う甕棺墓や方形周溝墓など、新しい墓が出現します。

特に方形周溝墓は、溝を方形に巡らせた内側に掘った土などを中心に盛土して作られたもので、大きさや副葬品（墓に備えられた土器や勾玉などのアクセサリーなど）に差があり、集落内で身分の差が生じていたことが分かります。

発掘された方形周溝墓（山田　新井遺跡）

方形周溝墓（イメージ）

また、方形周溝墓からは、底部穿孔と呼ばれる底に穴の開いた土器が見つかることが多く、土器の底に穴を開け、使用できない状態にする行為は、生きている人と死者の世界の器を分ける儀礼的な行為だと考えられています。

滑川町では弥生時代の新井遺跡で１辺１０ｍ前後の方形周溝墓６基などが発掘調査されており、当時の墓制の様子を知ることができます。